

---

# Fate/Stay Night-Reconstruction

リル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Fate/Stay Night - Reconstruction

### 【コード】

N6908Q

### 【作者名】

リル

### 【あらすじ】

Fateの再構成モノです。士郎が切嗣から聖杯戦争の存在を聞いていて、という設定です。原作の設定無視しまくりですのでそういうのが苦手な方は遠慮しておいた方がいいかと。あ、オリキャラとかは出さないつもりです。 - 出さないつもりでした。

## はじめりのよる ? (前書き)

よくあるFateの再構成モノです。切嗣が士郎に聖杯戦争のことを話していたら・・・という設定です。拙い文章ですが頑張りますのでよろしくお願いします

はじまりのよる ？

「 な」

衛宮士郎は愕然としていた。

目の前 - 正確には彼が身を隠している木の陰から40メートル程離れた場所 - で冗談みたいな物々しい武装をした赤い男と青い男が繰り広げているのは、紛れもなく『殺し合い』だった。

- 判る。アレは人間ではない。そんなこと、俺のように魔術を齧っている人間でなくとも誰でも判る。

当然だ。そもそも、ヒトはあんな風に動けるような生き物ではない。  
- つまり、アレは。

「サーヴァント？そんな、なんで」

聖杯戦争。冬木市に数十年に一度現れるとされる、持ち主のあらゆる願いを叶える「聖杯」を巡る7人の魔術師と7騎の使い魔マスターによる殺し合い。  
サーヴァント

10年前自分から全てを奪ったあの戦争が、

「...また、始まるうとしているのか」

.....

違う。もう、始まっている。

- ギリ。齒軋りする。赤い世界。助けを求める人達。助けられず、ただ生き延びようと彷徨った自分。それは、衛宮士郎の原初の記憶  
- - - -

それが、いけなかったのか。

「誰だ―――！」

青い男が、じろりと、俺を凝視した。

「―――っ！」

それで、あの青い男 - 獲物からして恐らくランサーのサーヴァント  
- の標的が俺に切り替わったのがわかった。脇目も振らず走り出す。  
あれは英霊。到底人の身で敵う相手ではない―――！

校舎に入る。逃げ切れないことなどわかっている。敵わないことも  
わかっている。それでも、最後まであきらめてなんかやらない。絶  
対に生き延びてやる。そのためには少しでも、自分に有利な状況を。  
この幅の狭い廊下なら槍を存分に扱うことは出来ないはず―――。

はじまりのよる ?

思考をクリアに。武器は投擲用のナイフ6本のみ。構わない。衛宮士郎は魔術師だ。扱うものは自分自身。

「よう。割と遠くまで走ったな、オマエ」

背後からランサーの声。・・・焦るな。まだ早い。

「運がなかったな坊主。ま、見られたからには死んでくれや」

ランサーの声に殺気が灯る。その槍が振るわれる直前、

「・・・だあつ」

振り向きざまに、持っていたナイフを全て投擲した。

「なにつ!?!」

ランサーの驚きの声。切嗣オヤジ譲りの投擲術。眉間、喉、手足、そして心臓を寸分の狂いなく狙い一息に放たれたナイフは・・・

キキキキキイン。

その全てを、槍の一振りで防がれた。

「・・・」

あらためて、相手のとんでもなさを実感する。だが、こちらもこの

程度で敵を撃退できるだなんて思っていない。俺が求めたのはこの一瞬の間。

「トレス・オン  
投影、開始」

そう、衛宮士郎に出来るのは想像の中で相手を打ち倒すことのみ。もとよりこの身は、ただそれだけに特化した魔術回路……！！

「貴様、それは……」

ランサーが、俺の手に握られた干将・莫耶を見て再び驚きの声を上げる。

俺が魔術師だったのが余程意外だったのか、それとも別の理由か。そんなことはどうでもいい。

生き延びる確率が少しでも高まるんなら、それにこしたことはない――！！

「……行け」

つばやきと同時に、両の手に持った干将・莫耶を投げつける。

「ハッ、こんなものが当たるとでも……」

躲すランサー。だがそれでいい。はじめから勝利など頭に無い。俺の目的は、ただこの場から立ち去ること……！！

「……壊れた幻想」  
ブローケン・ファンタズム

瞬間。あらゆる光景が、吹き飛んだ。

壊れた幻想。魔力の詰まった宝具を相手にぶつけて壊すことで魔力を暴発させるという、ミサイルや爆弾さながらの宝具の使用法。本当ならこんなわざと武器を壊すような真似はしたくないんだが、そんなことも言ってられない。

ランサーがどうなったかなど確かめる暇すらない。これでもランサーが健在で追ってきたなら - その時は詰みだ。不意打ちは二度と通じないだろう。だから、振り返らず校舎を抜け、家へと走った。逃げ切ることは出来ない。なら、打倒するしかない。今朝から感じていた、左手の傷跡のようなものへの違和感。これが令呪なら、自分もサーヴァントを呼べるはず - ！

ドゴオオオオオン。

校舎の方で何か、爆発でも起きたかのような音がした。何の音かと足を止めた瞬間、見覚えのある人影が見たことのないようなスピードで走り去って行くのが見えた。

「アレって - 衛宮君？」

状況からして、彼が目撃者だったのだろう。

良かった、どうやらアーチャーは間に合ったようだ。そうほっと胸をなでおろした瞬間、頭の中に直接語りかけて来る声があった。

( . . . 凜、聞こえるか )

( . . . ええ、どうしたの？今そっちに向かっているけど )



(・・・ランサーと交戦中だが少しかりマズイ状況になった。場合によっては宝具を使用するかもしれんから、先に許可をとっておく)

(・・・ちよ、ちよつと待った！アンタ記憶無いクセに宝具使えんの！？いやその前に状況を説明！)

ドオオオオン。校舎の方からまた大きな音がしたと思つたら、次の瞬間目に映つたのは突き破られポツカリ穴が空いた校舎、そこから出たと同時空高く飛び上がり槍を構えるランサーだった。

はじまりのよる ？

アーチャーは目撃者を消すために校舎へと走ったランサーを追っていた。

自分の足ではサーヴァント中最速のランサーに追いつけるべくもないが、追いつく必要はない。

・どうせ結果はわかっている。衛宮士郎はここで死ぬ。

だが、遠坂凜に命を救われ、結果聖杯戦争へとその身を投げ出していく。『彼女』と共に。そして、その身勝手な自己犠牲の精神と共に。

・双剣の柄をきつく握り締める。

『衛宮士郎』を殺す。最も矛盾の大きくなる形で。そして、自分はこの『環』から抜け出す。

・

それが、この聖杯戦争におけるオレの目的。――いや、そうでなくともあのようないい男を生かしておくわけにはいかない。自分を救うことすらできないのに他人を救うなどという讒言を吐く男は――

ドゴオオオオオン。

――驚きに足を止める。

校舎の廊下。そこにあったのはかつての自分の死体ではなく、崩れ

落ちた天井の瓦礫の山だった。

……どういうことだ。

いや、可能性としては充分有り得る。そもそも無限に広がる平行世界の存在を考えれば、この世界がかつて知つたる自分の世界と同じである、という確率の方が明らかに低いのだ。だが、それなら、『俺』は一体……？

……ヒュン、と。風を切る音がした。

それが恐らく先刻まで瓦礫の山に埋もれていたであろうランサーの刺突である、と気付く前に体は反応し、双剣は槍を防いでいた。

「よう。余所見とはいいい度胸じゃねえか、テメエ」

一旦距離をとるランサーにアーチャーは皮肉交じりの声で返した。

「いや、まさか英雄ともあるうものが油断していたとはいえ一般人に遅れをとると思わなかったのね。少し、呆氣にとられてしまったよ、ランサー」

「へつ。まあ確かに油断はしていたかもしんねえが、さっきの坊主はなかなか筋のよさそうな戦士だった……」

ぜ。――なにより、こつち側の人間だ」

フンと鼻を鳴らしつつランサーが答える。

――こちら側の人間。つまり、衛宮士郎は魔術を行使したと言っわけか。

「ふん。いずれにせよ、アルスターの大英雄クーフリーンともあるうものがあのような小僧一人殺し損ねるとはな。――全く、クランの猛犬の名も地に落ちたというものだ」

その瞬間。空気が一変した。

放たれる殺気。ギシリ、と音を立て魔槍が首をもたげる。因果を狂わす力を持った槍が、主に仇名す者の心臓を貫き受けんと呼応する。

「よく言った、アーチャー。――ならば、まずは、オマエが先に逝け」

アーチャーに答える余裕などない。ランサーの次の一撃が文字通り『必殺』であることを悟った彼は、手にしていた双剣を捨て、最速で自己の裡に埋没する。

「――行くぞ。この一撃、手向けとして受け取れ」

ランサーの体が深く沈んだかと思った次の瞬間、校舎の壁を破壊し、  
槍兵は宙に舞っていた。

「……突き穿つ死翔ゲイ・ボルクの槍……!!!」

元より投擲用の武具であった必殺の槍。

令呪の縛りも無い今、ランサーは怒号と共に全力でその槍を赤い弓  
兵へと打ち下ろす……!!

・その、直前。

「I am the bone of my sword《体は  
剣で出来ている》」

「……熾ロー・アイアス天覆う七つの円環……!!」

真名が開放された。



はじまりのよる ？

――激突する槍と盾。あらゆる回避、あらゆる防壁を突破する  
箭の必殺の槍。

それが、アーチャーの“宝具”によって停止させられていた。  
何処からか取り出された七枚の花弁は主に迫る魔弾を食い止めよう  
と抵抗する――！

其の名はアイアス。トロイア戦争において大英雄ヘクトールの投  
擲を唯一防いだアイアスの盾。

花弁のごとき守りはその実、一枚一枚が古の城壁に匹敵する、投擲  
に対しては無敵とされる結界宝具。使用者であるアーチャーが知る  
限り、この守りを突破する槍など有り得ない。だが――

――それでも、槍は止まらない。

次々と四散していく花弁。魔槍は決して貫けぬと称された七枚目  
に達して尚、その勢いを緩めない。

殺しきれぬ魔槍の棘を前に、アーチャーは、

「――づ、あああああ……！」

裂帛の気合を以って盾に全魔力を叩き込む――！

パキーン。

そんな音と共に闘いは終わりを告げた。

アーチャーは満身創痍だ。突き出していた右手は朽木の如く、恐らくは次のランサーの槍の凡庸な一振りさえ受けきれないだろう。だが、それでも確かに、槍兵の必殺の一撃を防ぎきった。

「デメエ、一体何者だ」

ランサーが問う。それも当然。弓兵でありながら槍兵である自己と白兵戦で渡り合う程の実力を持ち、さらには自分の本気の一撃を防ぐ盾さえ見せた。・・・そんな英雄は、聞いたことが無い。

「君の見立て通りだ。ただの弓兵だよ」

「戯言を。弓兵が宝具を防ぐほどの盾など」

問い詰めようとしたそのとき。彼の主から命令が下った。

「チツ。悪いが勝負はお預けだ」

「ほづ。どうしたランサー。敵を目の前に背を向けるなど君らしくも無い」



「命令でな。宝具を使つてでも倒せなかつた以上、戻つて来いだよ。まったく。つくづく気に入くわねえマスターだぜ。・・・忘れるな、アーチャー。お前の心臓は、このオレが貰い受ける」

そんな言葉を後に、青い槍兵は立ち去つた。

アーチャーは追おうとする素振りを見せない。最速のサーヴァントに追いつけるはずもないし、魔力を使い果たした身で倒せるような甘い相手ではない。何より・・・

「ちよつとアーチャー！！マスターである私に断り無く、何勝手に派手にドンパチやらかしてんのよ！ああもう、校舎に穴空いてる…。始まつて早々綺礼に皮肉られるじゃない！！つていうかあんた、宝具使えるならそうと先に言いなさいよ！もしかして記憶無いつても嘘！？だったとしたら承知しないわよ！ああもう、言いたい事が山ほどあるんだから、そこに直りなさいつての…！」

追いついて来た彼のマスターに、この状況を説明しなければならぬのだから。

「まあそう怒るなマスター。私も好んであのような状況になつたわけではない。むしろ、ランサーを退けたことを褒めてもらいたいくらいだ」

「そんなボロボロの体で何言つてんのよ！ああもう、目撃者が居たばっかりにこんな・・・」

「・・・あ、マズ。衛宮君の記憶消すの忘れてた」

「そのことだが。凜、目撃者とは知り合いか」

「あ、うん。まあ顔見知り程度だけだね。アーチャーが助けてくれたお陰で無事よ」

「いや、私は間に合わなかった。凜、その目撃者……衛宮とやらは、魔術師である可能性が高い」

ソレを聴いて彼女の口がポツカリ空く。どうやら、知らなかったようだ。となればやはり、この世界でも現時点では衛宮士郎と遠坂凜の仲はそう親密なものではないようだ。

「え、うそ……」

「ランサーが言うにはな。だが、あのランサーから逃げおおせるくらいだから、やはりマトモな人間ではないのだろう。さて、どうする凜」

一拍置いて、彼女の顔が引き締まる。やはり、遠坂凜は魔術師だ。それも一流の。魔力量、理解力、突然の状況への対応力。どれを挙げても申し分ない。目撃者の記憶を消すことを忘れる……などという致命的な“うっかり”さえ除けば。

「追うわ。アーチャーが感じなかったことはマスターではないんでしょうけど、そうなる可能性もある。話し合う必要があると思う」

ね。幸い、彼の家は知ってるし」

「話し合う、か。やれやれ、つくづく君は甘いな」

赤い外套の騎士は主の決断を聞き霊体化する。

皮肉ぶっているが、心のどこか奥底では、彼女のそんな甘い部分に安心している自分がいた。

そうでなければ、彼女らしくないと。

はじまりのよる ?

「ああクソツ…やっぱり何も無い…か」

ランサーとの邂逅後、間違いなく今までの人生最高記録を更新する速度で家に辿り着いた俺は、切嗣の部屋に何かサーヴァント召喚に関する資料が無いかと探し回っていた。

・令呪はある。左手にある傷跡のようなものがそれだ。

・だが、呼び方がわからない。それじゃあ意味が無い。

家に帰って来る途中も、帰って来てからもサーヴァントよ来い、なんて念じてみたはものの何の変化もない。故に、先程からずっと切嗣の遺品を探っていたわけだが。

「どうするかな…」

やはり、サーヴァントに関連するようなものは何も無い。それも当然か。切嗣<sup>オヤジ</sup>は、聖杯戦争について多くを語りたがらなかったし、この戦争が再開・しかも、こんなにも早く・されるなんて思ってもみなかったのだから。しかしこれでは八方塞がりだ。ランサーのマスターが確実にこの戦争に勝利しようと考えているなら、マスターになる可能性のある俺を狙ってくるだろう。そのときに、サーヴァントが居ないんじゃあ生き延びることなんてとても…

カランコロン。

「……！」

警鐘が鳴った。魔術師の敷地に見知らぬ者が侵入したため、結界が反応したのだ。

「こんなときに泥棒……のわけ、ないよな」

このタイミングだ。さっきのランサーか、それとも別の奴かは知らないが、衛宮士郎の“命”を盗りに来たと見て間違いないだろう。思考が戦闘用に切り替わる。賊はもう家の中だ。サーヴァントが霊体化して潜んでいるとしたら、まず一撃。一撃受けたあと、土蔵に逃げ込む。曲がりなりにも、あそこは俺の工房だ。あそこならひよつとしてサーヴァントを呼べるかもしれない。

「トリス・オン  
投影、開始」

出来るだけ丁寧に、だが最速で、愛用の剣を編む。

・陰陽の夫婦剣、干将・莫耶。宝具としてのランクは低いが、頑丈さは折り紙つきだ。

この剣ならば、サーヴァント相手でも一撃や二撃は耐えられるだろ

う。 . . . それにしても。

「なんだ、実戦だとこんなに上手くいくんだな」

普段の鍛錬時、投影には最低一分程度の時間が掛かっていたのだが。  
先程の校舎にしても、今にしても、普段からしてみれば異常なほどの速度だ。

「火事場の馬鹿力ってやつか」

ともあれ。

武器は持った。来るなら来やがれ、と身構えた瞬間。

「 . . . . . ! 」

ぞくん、と背筋が総毛だつのを感ずると同時に、頭上に向けて全力で双剣を振るっていた。

「ぬ . . . . . ! 」

キーン、という音で、自分がいつの間にかやって来ていたランサ

「の天井からの攻撃を防いだのだと判ったが、理解したときにはもう窓に向かって駆け出していた。」

ガシャン。窓をぶち割って庭へ出る。後はもう土蔵まで一直線なのだが――。

「よう。さっき振りだな、坊主」

やはり、そんなに甘い相手ではない、か。

いつの間にか俺の正面に回っていたランサーと対峙する。

「さっきも思ってたんだが、なかなか変わった芸風だな、オイ」

「そりやどうも。まさか英雄に褒めてもらえるとは思わなかったよ」

会話しつつ、隙を探る。はじめからランサーに勝てるとは思っちゃいない。サーヴァントに対抗できるのは同じサーヴァントのみ。

だからそのためにまず、何とかして土蔵まで駆けなければならぬ――！

「ほう。やはり知ってたのか」

「これでも魔術師の端くれなんですね。でも見ての通りサーヴァントもいないし、マスターじゃない。そもそも聖杯戦争が再開してること自体知らなかったんだ。――ってことでもう、俺を殺す必要は

なくなつたんじゃないかな」

「そういうわけにもいかねえな。本当かどうかわからんし、俺のマスターは“目撃者は消せ”の一点張りでね。それに、何より……」

ランサーが槍を構える。そこには一分の隙も見当たらない。やはり、やるしかない。双剣を構え直す。

「やられっ放しつてのは性に合わないんでな！」

ガキーン！

双剣と槍が火花を散らし交差する。なんとか、初撃は防げた、が――

「やるじゃねえか。そら、次だぜ――！」

「ぐっ……！」

情けない。たった一撃受けただけで、もう腕が痺れている。化け物め・ハンマーを持つてるわけでもないのになんつー威力だ！

キーン！

二撃目で、右手に持っていた莫耶が吹き飛んだ。陰剣は弧を描いてランサーの後方へと飛んでいった。



「もう終わりか。意外に呆気なかったな」

がら空きになった右胸を穿たんとランサーが三撃目を放つ。

防御が間に合わない。だが、間に合わせる必要もないのだ。なぜなら、

「何!？」

先程後方へと吹き飛んだ陰剣莫耶、そして俺自身が今放った陽剣干将。

ランサーは夫婦剣の性質により磁石のように引き合い自身を襲う双剣を迎撃しなければならぬのだから――！

ランサーの横を抜ける。同時に懐から取り出した発煙筒を足元に叩き付ける。

有り得ない方向と前からの奇襲及び煙による視界の篡奪。いかにサーヴァントとはいえ、これなら――！

が。ガギインという音。

類まれな直感スキルによるものか。あるいは何らかの加護を得ているのか。どちらにしろ、余程名のある英雄なのだろう。ランサーは、あの状況下での前後からの同時奇襲を、獲物を使わずに回避したのだ――！

だが、関係ない。土蔵はすぐ目の前だ。中に入ればアレに対抗で

きるサーヴァントを……

「……………飛べ」

「……………え？」

振り向いた瞬間、いつの間にか俺の背後へと迫っていたランサーはくるりと背中を向け、回し蹴りを放ってきた。

「……………が」

一瞬意識が飛んだ。とんでもなく重たい一撃がモロに入った。

蹴り上げられた胸が痺れ、呼吸もできない。吹っ飛んだ自分の体は土蔵の扉を強打し、そのまま重い扉を弾き開けた。土蔵の地面に背中から叩き付けられる。

「……………あ」

チャンスだ。目的地に辿り着いた。だって言うのに、今の一撃の余韻で動くことすら……

「詰めた。今のはわりと驚かされたぜ、坊主」

目前には、槍を突きだしたランサーの姿があった。

……死ぬ。アレが突き出されれば自分は死ぬ。走る銀光。俺の心臓に吸い込まれるように進む穂先。

他のことなど考えられない。ただ、死ぬと。十年前のあの日のように受け入れ……

……受け入れられなんかできっこない。ふざけてる。死ぬ？こんなところ？

助けてもらった。魂を吹き込んでもらった。多くの命を犠牲にして、自分は生き残った。

だから、簡単には死ねない。俺は生きてやらなくちゃいけないことがある。

果たさなきゃいけない義務がある。なのに、死んだら果たせない。だから、死ねない。

なのに。なのになのになのに。こんなにも簡単に自分は死ぬ。それを止めることが出来ない。

俺には出来ない。だから。誰か。

『……………誰か、助けてくれ……………』

「え……………」

それは、本当に。

「なに……………!?!」

魔法のように、現れた。

目映い光の中、俺の背後からそれは現れた。

・思考が停止している。俺にわかるのはそれが侍のようないでたちをしてることだけ……。

ぎいいいん、という音がした。

現れるなりそれは、俺の胸を貫こうとした槍を弾き、そのまま躊躇うことなくランサーへと踏み込んだ。

「……正気が、七人目のサーヴァントだと……!？」

槍を構えなおし、侍を迎撃するランサー。が。

がきいいん!

剛剣一閃。現れた侍の一撃を受けてたたらを踏むランサー。

「くっ……!」

狭い土蔵では不利と悟ったのか、獣のような俊敏さでランサーは外へと飛び出す。

退避する槍兵を体で威嚇しつつ、侍はこちらを振り向き、

「……問おう。お主が拙者のマスターか」

凜とした声で、そう言った。

はじまりのよる ? (後書き)

やってしまいました…。オリキャラ出さないって言ったのに…。  
いや、おりじなるじゃないからセーフなのか…?とにかくこれじゃ  
あもう、題名変えた方がいいかもですね。ごめんなさい。

## はじめりのよる ? (前書き)

ごめんなさい、パソコンが壊れたせいで投稿が大幅に遅れてしまいました。

これからはこういうことがないように気を付けます。  
しかし、機械って本当に壊れるとき火を吹くんですね。



はじまりのよる ?

「……ああ、そうだ」

毅然とした態度で、そう答えた。

目の前にいる少年は俺の呼び声に応えて現れてくれたのだ。なら、こつちもそれ相応の態度をみせなければならぬ。これから先、厳しい闘いを共に走り抜けるパートナーとして。

静かに俺の目を見つめ、少年は頷いた。

「サーヴァント・セイバー、召喚に従い参上した。マスター、指示を」

二度目の声。

それを耳にした瞬間、左手に痛みが走った。

「……っ」

思わず左手の甲を押さえつける。

手を離すと、そこには剣のような形状の令呪が形を成していた。

「……セイバー、外のランサーを迎撃してくれ。援護は任せる」

再び頷いたかと思った次の瞬間、弾丸の如き速さでセイバーは土蔵の外へとその身を運んでいた。

「く……」

援護は任せる、と言ったものの召喚後のせいか体が重い。魔力もあまり残っていないし、おそらく役に立つことはできないだろう。それでも、見守ることぐらいはできる、とセイバーの後を追った。

雲に隠れた月の下、響く剣戟。  
闇の中で火花を散らす鋼と鋼。

土蔵から飛び出したセイバーに、ランサーは無言で襲いかかった。セイバーは槍を一撃で払いのけ、更に繰り出される槍を弾き返し、その都度、槍兵は後退を余儀なくされる。

「……」

セイバーは間違いなく、相手を圧倒していた。

でも、俺は。ランサーに苦悶の声を洩らさせるほどのセイバーの剣技よりも。

その手に持つ剣に。心を奪われていた。

「ハッ……真剣勝負の場に、随分となめた真似をしてくれる。まさか、斬れない剣とはな……！」

「キサマこそ、本気を出しているようには見えないぞ、ランサー！」

更に一段と、セイバーの剣勢が激しくなる。そして、次の瞬間、セイバーの剣はランサーの手から獲物を叩き落とした。

「やった……！」

そのまま距離を詰め、とどめとばかりに振るわれるセイバーの一撃。それをあっけなく躲すランサー。けど、これで終わりだ。ランサーが槍を拾ってセイバーを迎え撃つより早く、確実にランサーに一撃を与えられる……！

「調子に乗るな、たわけ……！」

が、ランサーは。あるうことが、足で槍を持ち直し、そのままセイバーの心臓を貫く……

……しかし、そこにセイバーはおらず、槍は空を切った。セイバーの姿は空中。  
空高く飛び上がり、自然落下を利用した威力の高い斬撃で一気に敵を斬り裂かんとする……！

攻防は一瞬。

槍を構えなおし上空からの攻撃を防ごうとするランサーと、体ごと薙ぎ払うセイバーの一撃……！

「ぐっ……！！！」

「……」

弾き飛ばされたランサーも、弾き飛ばしたセイバーも互いに不満の色を表した。

お互いがお互いを仕留めようと放った必殺の手だ。窮地を防いだからと言って、そんなことには一片の価値も見出せないだろう。

間合いは大きく離れた。

今の攻防は互いに負担が大きかったのだろう、両者は距離を取ったまま静かに睨み合っている。

「……どうしたランサー。止まっていたのは槍兵の名が泣くぞ。そっちが来ないのなら、拙者から行かせてもらうが」

「……は、わざわざ死に来るか。それは構わんが、その前に一つ提案だ」

ランサーは槍の穂先を僅かに下げる。それは戦闘を止める意思表示のようにも見えた。

「お互い初見だしよ、ここらで分けにするって気はないか？オマエのマスターは召喚の反動で動けんようだし、オレのマスターも姿をさらせん大腑抜けだ。ここはお互い、万全の状態になるまで勝負を持ち越した方が好ましいと思うんだが」

悪い話じゃないだろう、とランサーは言う。

「……いや。マスターが狙われる危険性がある以上、それを見過ごすことはできん。ランサー。悪いが、キサマにはここで倒れてもらう」

「そうかよ。ったく、こっちは結構疲れてんだがな。まったく、今日は忙しい一日だぜ」

瞬間。

ぐらりと。

二人の周囲が、歪んで見えた。

「な……」

ランサーの姿勢が低くなる。  
同時に巻き起こる冷気。

魔槍。まさに魔の槍だ。まさかあそこまで貪欲に、大源<sup>マナ</sup>を吸い上げるなんて。

あの槍を中心に、吸い上げられた魔力が渦となって脈動している -  
- - - -

「宝具……!!」

俺が口を出すまでもない。

あの槍がどれほど危険か是对峙しているセイバーが一番よくわかっている。

セイバーは一度相手を強く睨みつけた後、剣を鞘に納めた。

「ほう、抜刀術ってヤツか」

「……………」

セイバーは答えない。

ただ、ランサーから一度も視線を外さず次来るであろう必殺の一撃に備えている。

「……………じゃあな。その心臓、貰い受ける……………」

獣が地を蹴る。

それとほぼ同時。俺の目には消えたようにしか見えない速度でセイバーも敵へ突っ込んで行った。

スピードは恐らく、ほぼ互角。

でも、抜刀の鞘走りで剣速が加速したセイバーの方が早い。  
横一文字にランサーを叩き切る

！

殺った、と俺が確信した瞬間、ランサーは宙へと飛び上がっていた。だが、それは俺から見ても明らかかな下策。跳躍は距離にして2メートルほど。

あれでは、槍は届かないしセイバーの次の太刀も避けきれない  
！

その瞬間。

「  
“ 刺し穿つ ”」

それ自体が強力な魔力を帯びる言葉と共に、

「  
“ 死棘ホルクの槍 ”」

ランサーの突き出した槍は、そこからは届くはずのないセイバーの心臓へと遡っていった。

「……！」

だが、セイバーは。  
まるでランサーの槍が来ることを予想していたかのように。  
体をコマのように半回転させ死の槍を躲す

！

ドッ。

結果、槍が貫いたのはセイバーの右肩。  
獲物を仕留め切れなかったランサーは着地すると同時、距離をとる  
うとする。そこに、

「双龍閃……！」

セイバーの左手。鞘での次撃が振るわれた

！

「がっ……！？」

予想だにしない攻撃を避け切れず、ランサーは吹っ飛ばされた。  
当然だ。いくら抜刀術は抜刀が躲された場合に無防備になるとはい  
え、それを埋めるための鞘での二段抜刀術など、聞いたこともない。



弾き飛ばされたランサーは大きく放物線を描いて地面へと落下  
いや、着地した。

セイバーは追わない。

いかにランサーが手負いとはいえ、右肩に傷を負った状態で倒しき  
れる相手ではないと判断したのだろう。

敵ながら、あのランサーも見事だ。ヤツは、躲しきれないと見るや、  
セイバーの一撃に身を合わせることで衝撃を押し殺したのだ。

「チツ、まさか槍を躲ゲイボルクされるどころか一撃もらうとはな。やれ  
やれ、こりゃあ本当に必殺の看板も地に落ちたってもんだ」

「ゲイボルク。アイルランドの光の御子、ということか」

アイルランドの光の御子。つまり、ランサーの真名はクーフリーン  
ってことか。

真名がバレたランサーの顔が曇る。

「真名までばれちまうしな。本当なら、ここで決着をつけたいトコ  
口だが」

ランサーの手から武器が消える。

「臆病者の雇い主の命令でな。帰って来い、とのコトだ」

「　　追いはしない。だが、この勝負の決着は　　」

「ああ。決着はいずれ、必ずつけさせてもらうぜ、セイバー」

トン、という跳躍。

どこまで身が軽いのか、ランサーは苦も無く塀を飛び越え、夜へと消えていった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6908q/>

---

Fate/Stay Night-Reconstruction

2011年3月10日06時50分発行